

# ケルン日本文化会館日本語講座受講者に対する アンケート調査結果報告

学習者分析から新シラバスの提言へ

久保田 美子・奥村 三菜子

〔キーワード〕 ニーズ、レディネス、アンケート調査、自己評価、シラバス

〔目次〕

はじめに

1. アンケート調査の目的と内容
2. 調査結果と分析(1) レディネスとニーズ
  - 2.1 受講者のレディネス
  - 2.2 受講者のニーズ
3. 調査結果と分析(2) 自己評価とニーズ
  - 3.1 文字・文法項目に関する自己評価
  - 3.2 文型に関する自己評価
  - 3.3 語彙(トピック・テーマ別)に関する自己評価
  - 3.4 機能に関する自己評価とニーズ
4. 分析結果のまとめと新シラバスの提言
5. 今後の課題

おわりに

はじめに

ケルン日本文化会館では、1970年に初級コースが開設されて以来、日本文化紹介事業の一環として日本語の授業が行われている。現在の日本語講座のレベルは初級から上級まで6段階、クラス数は9クラスあり、初級前期クラスが3、初級後期クラスが2、中級前期クラス、中級中期クラス、中級後期クラス、上級クラス、上級新聞購読クラスが各1クラスである<sup>(1)</sup>。上級クラスは週1回110分、新聞購読クラスは隔週1回110分、他のクラスは全て週2回110分ずつを基本とし、10月から6月まで約36週でコース終了となる。2000年度の実受講登録者数は講座開始時で140名、途中登録者も含めると153名であった。そのうち初級レベルの学習者数は94名、中級レベルが33名、上級レベルが26名である。本講座では、毎年10月新年度開始時に簡単なアンケート調査を行っているが、今年

度は、年度終了時にもアンケート調査を実施した。本報告では、これらのアンケート調査結果を紹介するとともに、ドイツにおける一般成人日本語学習者の特性に関する考察を試み、今後の課題について考えたい。

## 1. アンケート調査の目的と内容

2000年度講座開始時(以下講座開始時)のアンケートでは、レディネス、ニーズに関して基本的な内容を尋ねている。学習者の年齢層や目的に毎年若干の変動があるため、常にそうした傾向を捉え教授内容に反映するためである。調査項目は、年齢、性別、職業、学習動機、学習の目的などである。講座申し込みと同時にアンケート調査への回答を依頼するため、この時点での回収率は毎年ほぼ100パーセントになる。

2000年度講座終了時(以下講座終了時)には、新たに下記のような項目に関し、アンケート調査を行った。年齢、性別、職業に関して再度尋ねたのは、講座終了時にアンケートに回答した受講者(講座受講を1年間続け、最終的にアンケートに協力してくれた受講者70名)が、講座開始時の受講者(140名)と年齢、性別、職業の割合の点で大きな違いが生じたかどうか確認する必要があったからである<sup>2)</sup>。

前述したように、当会館で日本語講座が始まってから約30年が経過している。その間、日本語教育の分野では目覚ましい発展があり、日本語学のみならず、教授法の面でも様々な研究が行われてきた。語学は知識だけでなく、実際にコミュニケーションの手段として利用できるものでなくてはならないという考え方は既に一般的なものとなっている。しかし、本講座受講者のように、日本人と接触する機会や、日本語を使う可能性が極めて少ないことが予想され、また純粋に興味として日本語を勉強する者が多い場合、どのような学習が望まれているのか、日本語を学ぶことで何が得たいと考えているのか改めて明らかにする必要があると考えた。また、現在本講座で採用している文型を中心としたシラバスで受講者のニーズを充分満たすことができているのかという点に関しても探る必要があると考えた。そしてそのためには、講座開始時に行われている基礎的なニーズ・レディネス調査だけでなく、さらに詳しい内容について調査する必要があると感じた。また、具体的な学習項目に関する調査(文型、機能、トピック別に尋ねるもの)は、自己評価という形式をとった。自己評価という形式は、本講座ではまだなじみがなく、この手法の趣旨が受講者に十分理解されるかどうか、また自己評価というものが客観性をもちうるかという点で疑問が存在することは事実である。しかし一方で様々な利点も報告されており(岡崎・吉武(1992))、1年の学習が終了する時点で、学習者自身が能力全体の現実的な見方を得て、自身のスキルについて内省し、把握する上で助けになればと考えた。特に、本講座では文型を中心としたシラバスを

## ケルン日本文化会館日本語講座受講者に対するアンケート調査結果報告

採用しており、機能やトピック・テーマを切り口にした場合、どの程度自己評価が可能なのかも調査したいと考えた。尚、本アンケート調査は、クラス名のみを記入、無記名の形式でおこなった。

### [ 講座終了時のアンケート調査項目 ]

#### ニーズ、レディネスに関するもの

年齢、性別、職業、ドイツ語の他に話せる外国語、来日経験、学習動機、日本語環境、学習の目的及び目標、自宅学習の有無、参考書や辞書の所有・利用状況、機材の所有の有無、外国語学習歴、外国語学習時の方法、外国語学習時に重要だと思ったこと、日本のどんなところに興味があるか、一般的に感心のあることについて

#### 本講座の評価に関するもの

授業時間、教師、授業方法、宿題、試験、教材に関する評価

#### 学習項目に関する自己評価とニーズ

##### 得意なもの / 苦手なものを答える

：発音、ひらがな、カタカナ、漢字、読むこと、書くこと、聞くこと、数字、単語、助詞、助数詞、動詞の形(て形、ない形、辞書形、可能形、受身形、使役形、過去形、否定形、活用の区別)、副詞、接続詞、疑問詞、敬語の形、だ体、である体、慣用表現、縮約形、文型(初級文型42項目・初級前半の受講者には学習したところまでの12項目)語彙(トピック、テーマ別に19項目)

##### 今、日本語でできること / これからぜひできるようになりたいことを答える

：簡単なあいさつ～レストランで注文する～意見を言う、文句を言う、フォーマルなスピーチをする、報告書や論文を書くなど機能別に41項目

尚、この項目の選定にあたっては、田中(1988)を参考にした。

本報告では、上記項目のうち、特にこの項目に関する調査結果を報告し考察を加える。

## 2. 調査結果と分析(1) レディネスとニーズ

### 2.1 受講者のレディネス

講座開始時、終了時の受講者の性別、年齢、職業はグラフ1～3のとおりである。受講者の職業で、学生の割合が、講座開始時37%であったのが終了時に31%に減り、会社員が27%から33%に増えていることを除けば、他の項目において目立った変化は見られなかった。

来日経験、日本語環境について、講座終了時のアンケート調査で調べた結果が、グラフ4、グラ

75である。来日経験の全くない受講者は、初級レベルでは52.3%であるのに対し、中級では12.5%、上級では0%と極端に減少している。また、日本語環境に関しては中級レベル以上の受講者で日本人の友だちがいると答えている者が多い。本講座の中級レベル受講者の場合、初級から継続して学習している者が多い。2000年度の場合、中級受講者33名のうち23名、約70%の受講者が初級からの継続受講者であった。本年度の中級レベル受講者の初級段階での日本語環境は詳しく調査していないため、初級段階で日本語環境が整っていた者が中級へ進んだのか、あるいは日本語環境のなかった者が中級へ進み、日本、日本人との接触を増やしていったのかは明らかにすることはできないが、後者であったとすれば、日本語学習が日本、日本人との接触を促進したということになるであろう。

さらに今回、機材の有無に関する調査を行った(表1)。その結果、テープレコーダーの保有者よりもCDプレイヤーの保有者のほうが多いことがわかった。また、コンピューターの保有者が94.3%と高い割合であるにもかかわらず、そのうちコンピューターに日本語環境が備わっていると回答した者は13名、コンピューター保有者の19.7%であった。今後、コンピューターを利用した学習が発展することが予想される中で、懸念される問題である。

日本語以外の言語の習得に関しては、英語が「よくできる」、あるいは「できる」と答えた受講者が、全体の94.3%、残り5.7%は「少しできる」という回答で、「できない」と答えた受講者は一人もいなかった。

## 2.2 受講者のニーズ

受講動機について尋ねた結果、日本に興味がある、日本語に興味があるという回答が多く、資格として必要、仕事・研究に必要と答えた者は比較的少なかった(グラフ6)。講座終了時に行ったアンケート調査では、さらに日本への興味を具体的に調査している(グラフ7)。この結果から、日本への興味が多岐にわたっていることがわかる。

講座開始時のアンケートでは、具体的に話す・聞く・読む・書くの4技能のうち、どの技能が最も学習したいのか尋ねている。その結果、最も多かったのが「話すこと」で76%、「聞くこと」は27%、「読むこと」は23%、「書くこと」は10%であった。講座終了時には、さらに日本語の具体的な学習項目に関し、何ができて(自己評価)何ができるようになりたいのかを尋ねている。この結果に関しては、次項で報告する。

講座終了時のアンケートでは、今後何年勉強する予定かという質問を行った(グラフ8)。日本への興味から学習している受講者が多いにもかかわらず、3年以上学習したいと答えている受講者が初級レベルで29名(65.9%)、中級で12名(75%)、上級で6名(60%)と圧倒的に多かった。長期的

な視野で学習している者が多いと考えるべきであろう。当会館の講座では学習開始後順調に進めば3年目から中級レベルに入る。多くの受講者が初級レベルに留まらず中級レベルまで進むことを考えているとすれば、授業の内容も、単なる日本語の紹介ではなく、中級レベルに到達できるよう、基礎力が確実に定着するよう考えなければならないであろう。

### 3. 調査結果と分析(2)ー自己評価とニーズー

#### 3.1 文字・文法項目に関する自己評価

ひらがな、カタカナ、漢字、助詞、助数詞、形容詞、動詞、副詞、疑問詞などに関して、さらにその個別の形も含め、得意な項目と苦手な項目を回答してもらった。その結果、ほとんどの項目が、初級から上級へと進む中、得意な項目に変っている。一方、敬語の形に関しては、重点的に敬語の形を導入した中級前半レベルで、得意であると答えた者が57%と半数を超えたが、上級に至って得意であると答えた者が40%になり、再び半数を下回った。

#### 3.2 文型に関する自己評価

文型に関しては、ほとんどの既習文型に対して「よくわかっている」と答える割合が非常に高かった(グラフ9)。伝聞や様態、自動詞・他動詞の文型に関して上級に至っても若干「よくわからない」と答える学習者がいるが、全体的にかなり高い割合で「よくわかっている」と自己評価している。

#### 3.3 語彙(トピック・テーマ別)に関する自己評価

語彙に関しては「あいさつの言葉」「天気に関する言葉」「職業に関する言葉」「食べ物や料理に関する言葉」など、トピックやテーマを項目にして得意なもの、苦手なものを答えさせた(グラフ10)。その結果、「その他」を除いた19項目のうち、過半数の受講者が得意であると答えた項目は、初級前半・後半で5項目、中級で9項目、上級で7項目であった。一方過半数の受講者が苦手であると答えた項目は、初級前半・後半で10項目、中級で9項目、上級で0であった。具体的には、次の四つの傾向がみられた。まず、「あいさつ」「天気」「乗り物」「家族」に関することばは、初級から上級まで一貫して半数以上の受講者が得意なことばであると答えている。次に、「病気・病院」「生活の中の道具」に関することばは、初級から中級、上級になるにつれて得意であると答える受講者の割合が増え、「職業」「食べ物や料理」「気持ち」「教育」に関することばでは、得意であると答える受講者の割合は目立って増えてはいないが、苦手であるという答えの割合が減っている。しかしその変化の度合いは項目によって一律ではなく、「病気・病院」「職業」に関する言葉は、初

級後半レベルではまだ過半数の学習者が苦手であると答え、中級に至ってようやく半数を下回っている。最後に、「政治」「経済」「科学・化学」「コンピューター」に関することばについては、初級から中級にいたるまで苦手であると答える割合が一貫して多く、上級に至って苦手であるという答えは減っているが、得意であるという答えも目立って増えてはいない。

全体的な傾向としては、まず、抽象的な語彙、社会一般に関する語彙が中級レベルまで苦手であり、上級に至って苦手であるという答えは減っているものの得意であるという答えも増えないことが挙げられる。次に、具体的な物の名前などに関する項目も上級に至って苦手であると回答する割合が極端に減ってはいるが、得意であると答える割合は初級、中級に比べてそれほど変化していない。当会館では、トピックやテーマを範疇として語彙を導入していないため、受講者がこうした範疇に基づいて語彙の知識を自己評価することが難しいと言える。

### 3.4 機能に関する自己評価とニーズ

機能に関しては、「簡単な自己紹介」「道を尋ねる・答える」「レストランで注文する」「文句を言う」「データやグラフを見て説明する」などの項目を立て、受講者に「今日本語でできる」と「できるようになりたい」ものを答えさせた(グラフ11)。3.2で述べたように、ほとんどの受講者が、学習した文型に対しては、かなり高い割合で得意であると自己評価していたが、それに比べると、その文型を利用してできるはずの機能面での質問に対しては、「今、日本語でできる」と答えられる受講者は少ないということがわかった。たとえば、上級レベルに至っても、「買い物」「郵便局や銀行の用事」「病気の状態を説明」「駅で切符を買う、ホテルの予約」「電車の時間を調べる」などサバイバルレベルの機能が「今日本語でできる」と答えられない受講者が10名中4名から6名いる。一方、こうした機能面での言語運用能力の必要性は充分感じており、「今日本語でできる」と答えられなかった項目に対して、「できるようになりたい」と答えている項目は多い。

## 4. 分析結果のまとめと新シラバスの提言

アンケート調査の結果から明らかになったことを以下にまとめる。

受講者の日本語学習の動機は日本及び日本語への興味であり、その具体的内容は多岐にわたる。

受講者は3年以上という長い期間を想定して学習を行っている。

初級段階では来日経験が少なく、日本人がまわりにあまりいない環境の者が多いが、中級、上級では、来日経験が増え、日本人の友達がいるという受講者が多い。

自己評価の結果から、文型の知識には自信があっても、それを実際にどのような機能で使用できるのか理解できていない受講者が多い。

## ケルン日本文化会館日本語講座受講者に対するアンケート調査結果報告

しかし、一方で、できないと感じている言語機能を身につけたいと考えている受講者も多い。

トピックやテーマ別の語彙に関しても自己評価が難しい受講者が多い。

の結果から、初級段階では実際に日本語を使用する環境になくても、中級に進むにつれて、友人ができたり、来日したりと実際に日本語を使う環境が増えていく可能性が大きいことがわかる。

また、の原因は、文型を中心としたシラバスで授業を行っていることにありと考えられる。講座開始時のアンケートで話すことを第一に考えている受講者が多いこと、講座終了時のアンケートで機能面の必要性を感じている受講者が多いこと、またの結果を考え合わせると、今後、機能やトピック・テーマにも重点を置いたシラバスを取り入れる必要がある。また、各レベルの機能目標を設定するだけでなく、それを明確に受講者に提示することによって、受講者の自律的な学習が促進されるものと考えられる。

本アンケート調査後、上記課題に取り組むべく、従来の文型を中心としたシラバスに機能や場面、話題を意識したシラバスを組み合わせ、新シラバスを作成した(表2)。従来は採用した教科書に提出されている文型や語彙がそのまま講座のシラバスとなる傾向が強かった。教科書とシラバスが一致しているという点で授業運営が行いやすいという利点はあったが、逆に教科書中の項目に縛られ、時代とともにシラバスを変更する上で難しい面もあった。今回、まず、できるだけ客観的に各レベルで必要とされる学習項目、機能、場面・話題を拾い上げ、その上で教科書中の項目との調整を図ることにした。学習項目選定にあたっては、『日本語能力試験出題基準』(国際交流基金・財団法人日本語国際教育協会(1994))、機能、場面・話題の項目選定にあたっては、ACTFL(American Council on the Teaching of Foreign Languages 全米外国語教育協会)の外国語能力基準(Buck(1989)、牧野(1991))を参考にした。日本語能力試験出題基準を参考にした理由は、現在広く世界中で実施されている日本語能力の試験であり<sup>(3)</sup>、またそこで示されている運用力認定基準も、文型、語彙、漢字、学習時間数などの点で各級のレベルと一般的に示されている初級、中級、上級の各学習目標とが一致する点が多いからである<sup>(4)</sup>。また、ACTFL外国語能力基準を参考にした理由は、日本語能力試験とは異なった、機能やタスク達成を基本とした視点から日本語運用力のレベルを定めていることにある。この二つの基準を組み合わせることによって相互に補完されたシラバスとなるものと考えた。例えばG(初級前半)クラスでは、全般的な機能として最小限のコミュニケーション、簡単な質問をしたり答えたりすることを目標とし、話す機能では、簡単な挨拶、買い物など14項目を挙げた。さらにその他の技能として、チラシなどから最低限必要な情報を読み取る、電話番号を聞き取る、買い物リストを書くなど、「読む」「書く」「聞く」能力も考慮するようにした。このレベルでの場面・話題としては日常的な場面、個人的な話題、身近な話

題を取り上げた。また、このレベルでの学習項目は日本語能力試験出題基準4級レベルの範囲とした。しかし、ここで現行の教科書中の項目との調整が生じた。例えば、『日本語初歩』では、希望を述べる「～たい」という表現や「好き」「嫌い」といった語彙は教科書の後半に導入される項目であり、初級前半の時期の教科書範囲には現れない。しかし、この文型や語彙は、日本語能力試験出題基準の4級レベルに含まれている。また、この文型や語彙は好みを述べたりごく簡単な希望を述べたりする機能を達成するために有効な学習項目であり、機能面からも初級前半で取り上げたほうが良い項目である。そこで新シラバス(表2)では、一応初級後半レベルで取り上げる項目とし、学習者のレベル、進捗状況をみて初級前半のレベルで取り上げることも可能であると付記することにした。

この新シラバスは2001年度から実験的に取り入れる予定であり、さらに改善していく必要があると考えている。例えば、海外において日本語を学習する受講者のため、特にドイツにおける日本語学習者のためという視点をまだ充分には取り入れていない。また、上述したように教科書とシラバスとの調整が必要な部分もあり、将来的には、教科書の見直しも必要になってくるものと考えている。

## おわりに

本講座は受講者の根強い学習意欲に支えられ、安定した数の受講者を受け入れつつ発展してきた。今後も学習者のレディネス、ニーズを常に把握しながら、ドイツで日本語を学習する一般市民の要望に応え、本来の目的である日本文化紹介のため努力していきたいと考えている。尚、講座開始時のアンケートは、歴代の講座講師(非常勤講師、派遣専門家を含む)及びスタッフの努力により作成され、実施されてきたと聞いている。これまでの本講座関係者の尽力に敬意を表し、深く感謝したい。

## 〔注〕

(1) 2001年度からのクラス編成は、上級コースを「読み」を中心としたコースと「会話」を中心としたコースの二つに分け、従来の新聞コースは上級「読み」のコースに発展的に吸収することとした。2000年度各コースでの使用教科書は、初級レベルが『日本語初歩』1課～32課(1981年・国際交流基金日本語国際センター著、凡人社発行)中級レベル前期が『日本語初歩』33課～34課・『日本語中級』1課～10課(1990年・国際交流基金日本語国際センター著、凡人社発行)、中級中期が『日本語中級』11課～14課、『現代日本語コース中級』1課～8課(1988年・名古屋大学日本語教育研究グループ編、名古屋大学出版会発行)、中級後半が『現代日本語コー



## ケルン日本文化会館日本語講座受講者に対するアンケート調査結果報告

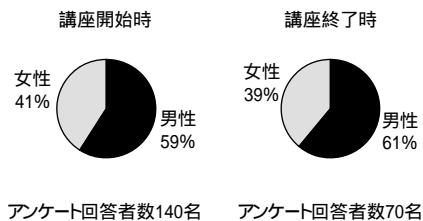
ス中級 』9課・『現代日本語コース中級 』10課～18課(1990年・同上) 上級コースが『長沼新現代日本語 』1課～10課(1992年・財団法人言語文化研究所東京日本語学校・凡人社発行)であった。尚、2001年度は教科書に関して若干見直しをする予定である。

- (2) 最終受講者数は97名であったが、その内アンケート回答者は70名であった。
- (3) 2000年度の受験者数は、国内外合計で201,021人であり、海外実施国は35カ国である。詳細は国際交流基金・財団法人日本語国際教育協会(2001)を参照願いたい。
- (4) 例えば、日本語教育学会編(1982)『日本語教育事典』によれば、「一般に初級といわれるのは、学習の開始から約200～300時間の授業時間をかけて行われる学習段階である。(中略)文型については、種々の見解が見られるが、文型による応用的表現能力を得ることを目標とする。文法は、助詞の機能、活用語の活用、受身、使役、敬体についての概念と正しい使い方。語彙は教え方にもよるが、約1,500～2,000語と、語構成の基本的知識など。文字は平仮名、片仮名と、基本的な漢字約500字の通常の音訓と読み書きが目標になる。」(P.633)となっている。一方日本語能力試験認定基準では、3級レベルで「基本的な文法・漢字(300字程度)・語彙(1500語程度)を習得し、日常生活に役立つ会話ができ、簡単な文章が読み書きできる能力。(日本語を300時間程度学習し、初級日本語コースを終了したレベル)」「(2001年(平成13年)度日本語能力試験実施要項)となっていて漢字数は異なっているが他の点ではほとんど一致した見解となっている。

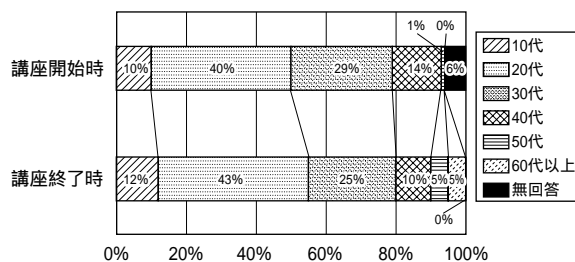
### 〔参考文献〕

- 岡崎敏雄・吉武康行(1992)「日本語教育における自己評価」『広島大学日本語教育学科紀要』2号  
広島大学教育学部日本語教育学科 pp.15-22
- 国際交流基金・財団法人日本語国際教育協会(1994)『日本語能力試験出題基準』凡人社
- 国際交流基金・財団法人日本語国際教育協会(2001)『日本語能力試験の概要2000年版(1999年度試験結果の分析)』
- 田中望(1988)『日本語教育の方法 コースデザインの実際』大修館書店
- 牧野成一(1991)「ACTFL外国語能力基準およびそれに基づく会話能力テストの理念と問題」『世界の日本語教育』第1号 pp.15-32
- Buck, K. (ed.) (1989) *Oral Proficiency Interview Tester Training Manual*. Yonkers, New York : ACTFL.

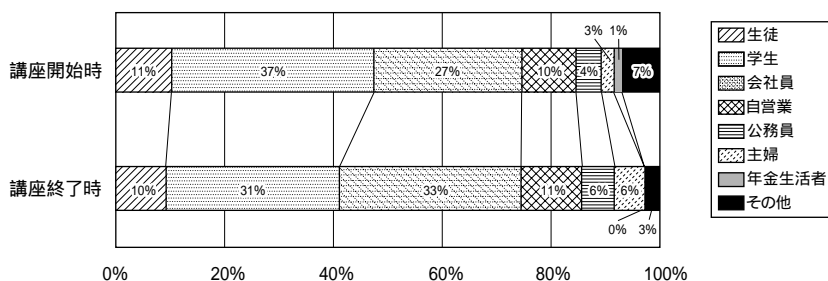
グラフ1 受講者の男女比



グラフ2 受講者世代比



グラフ3 受講者職業比



グラフ4 受講者の来日経験(講座終了時)

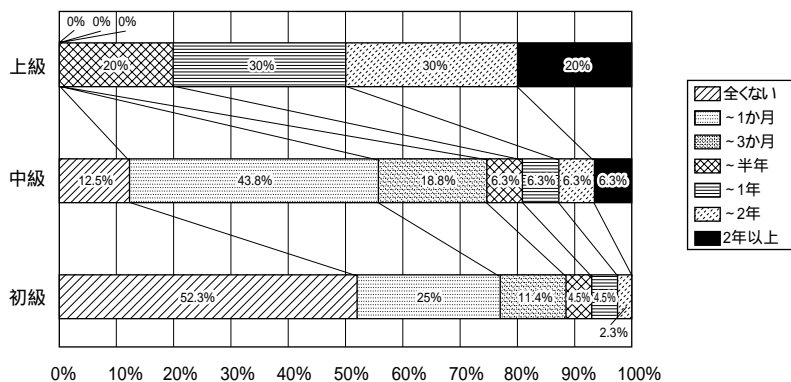


表1 機材保有者数 (講座終了時)

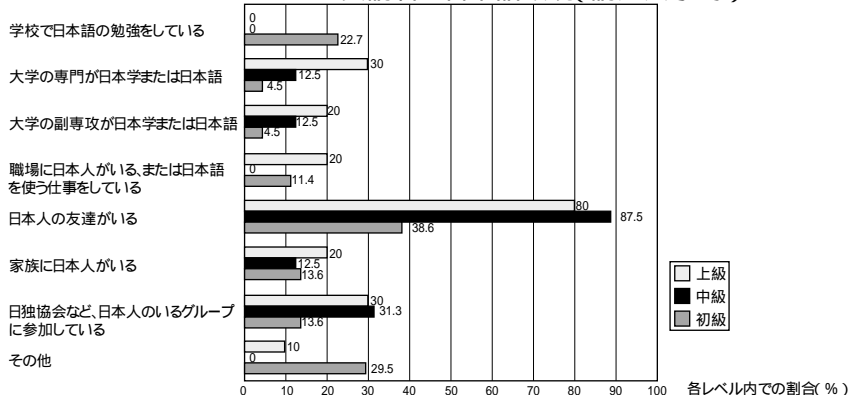
( )内は全体に占める割合

テープレコーダー	57	( 81.4% )
CDプレイヤー	61	( 87.1% )
コンピューター	66	( 94.3% )

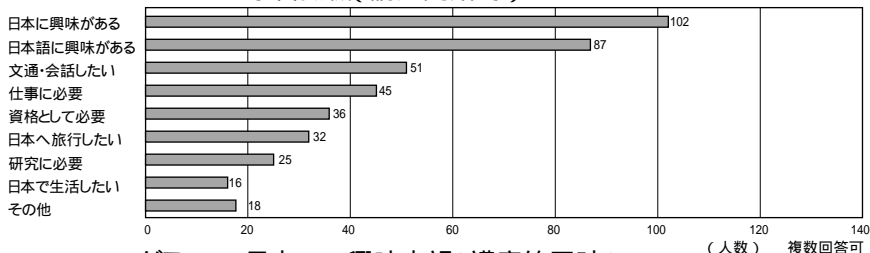
コンピューター保有者の内、日本語環境がある者 13名

# ケルン日本文化会館日本語講座受講者に対するアンケート調査結果報告

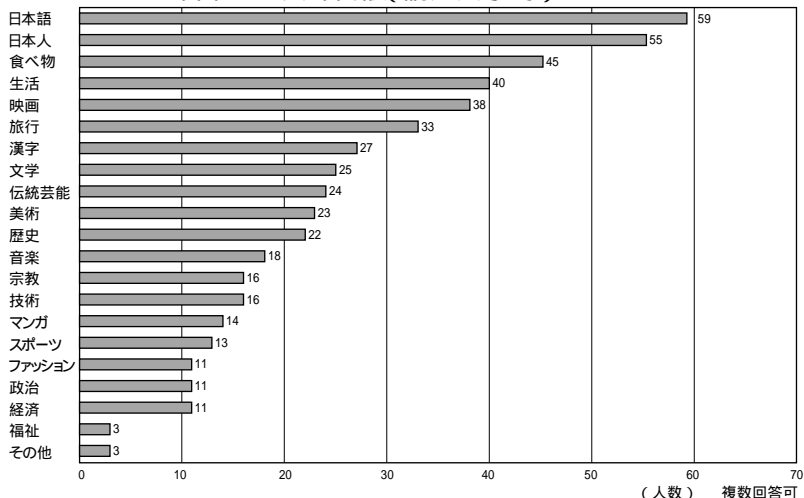
## グラフ5 受講者の日本語環境(講座終了時)



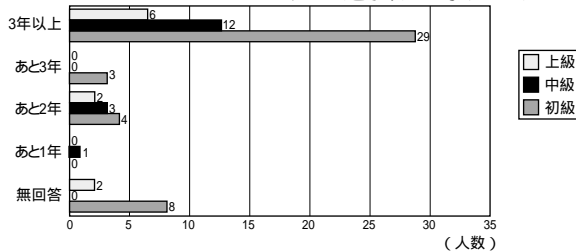
## グラフ6 学習動機(講座開始時)



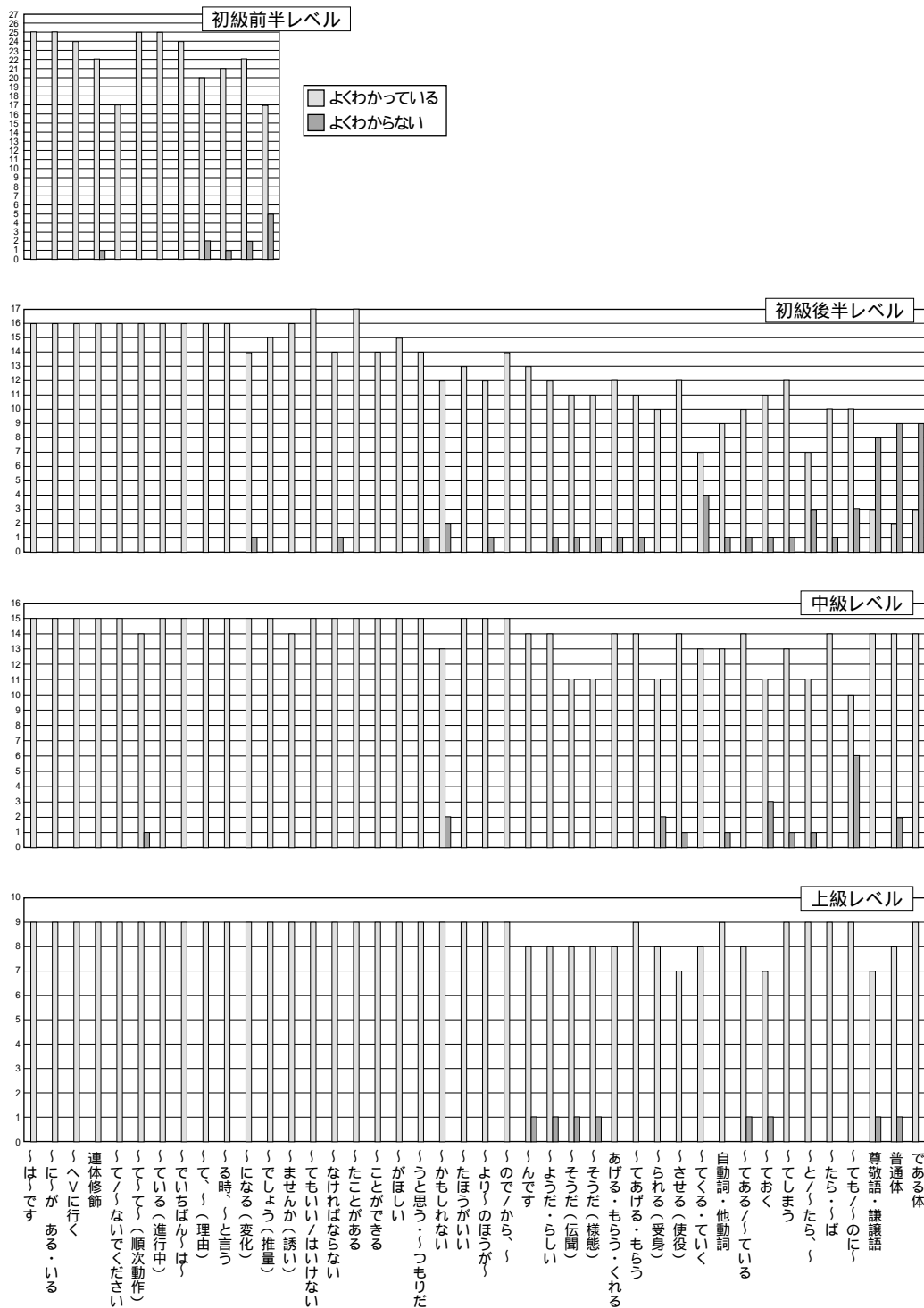
## グラフ7 日本への興味内訳(講座終了時)



## グラフ8 「あとのどのくらい勉強する予定ですか」(講座終了後)

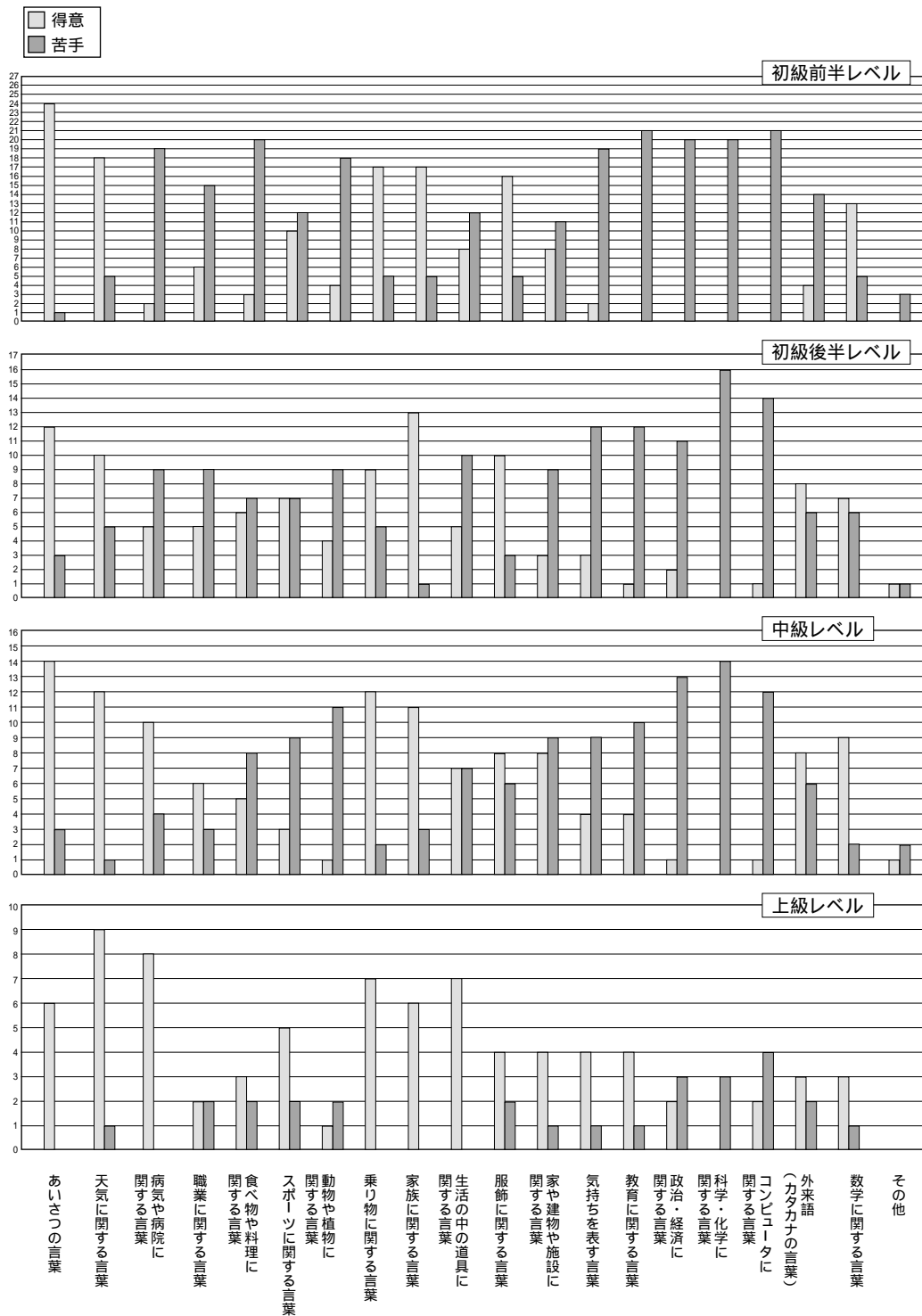


グラフ9 意味がよく分かっている文型・よく分からない文型( 文型別自己評価 )



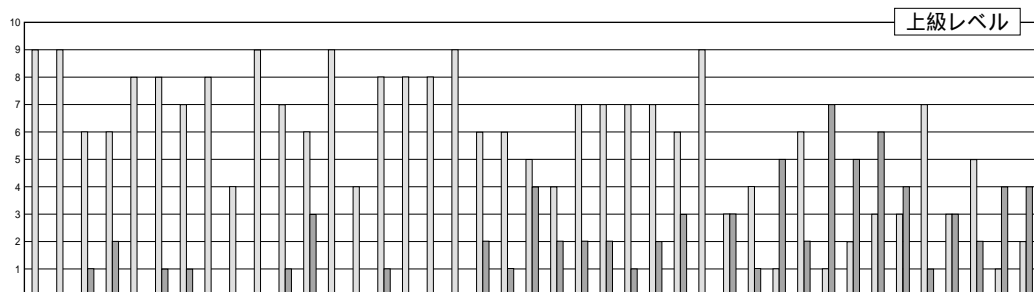
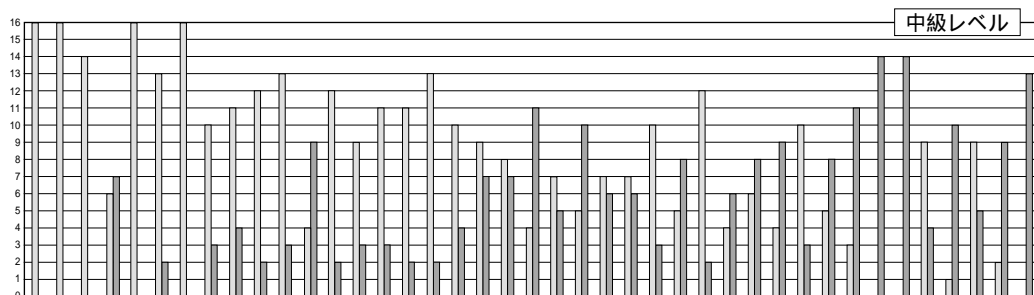
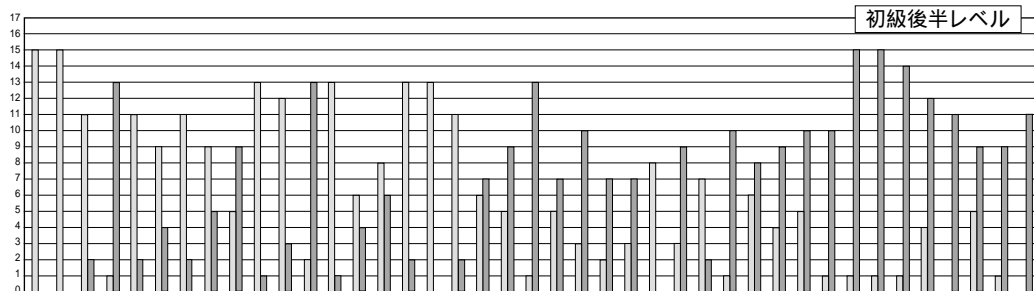
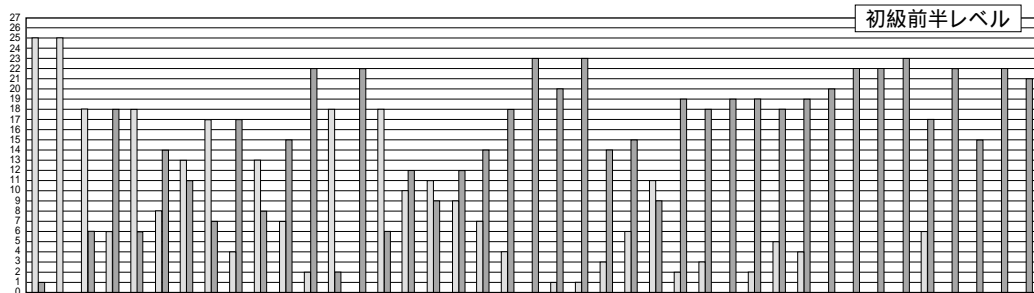
# ケルン日本文化会館日本語講座受講者に対するアンケート調査結果報告

グラフ10 得意なことば・苦手なことば(トピック / テーマ別)



グラフ11 今日日本語でできること・できるようになりたいこと(機能別自己評価)

□ 今日日本語でできる  
■ できるようになりたい



- 報告書や論文を書く
- 改まった手紙を書く
- 簡単な手紙を書く
- 改まった手紙を読む
- 簡単な手紙を読む
- 小説や雑誌や新聞を読む
- ニュースを聞く
- 映画やドラマなどを見る
- フォーマルなスピーチ
- 親しい言葉
- 敬語
- 安くしてほしいと交渉
- データやグラフを見て、説明
- 理由を尋ねる・答える
- 未来のことについて考えを言う
- 相手にしてほしいことをお願いする
- 文句を言われた時にあやまる
- 文句を言う
- 相手の意見に賛成、反対、意見表明
- 同僚を助けるために声をかける
- ニュースや新聞の情報を伝える
- 電車の時間を調べる、旅行計画
- 駅で切符を買う、ホテルの予約
- したいこと、ほしいものを言う
- やっていいこと、だめなことを聞く
- 食事に誘う、誘われる
- レストランで注文
- 病気の人にアドバイス
- 週末の行動、旅行について順番に説明
- 映画や本の感想
- 好き嫌いを言う
- 家族についての話
- 病気の状態を説明
- イベントの場所や時間について尋ねる・答える
- 道を尋ねる・答える
- 自国や町について簡単に説明
- 電話番号を尋ねる・答える
- 郵便局や銀行の用事
- 買い物
- 簡単な自己紹介
- 簡単なあいさつ

# ケルン日本文化会館日本語講座受講者に対するアンケート調査結果報告

表 2-1 ケルン日本文化会館日本語講座・レベル別到達目標及びシラバス( 初級レベル・機能項目)

	機能全般	機能( 具体例 )	
		話す	その他の技能
G・ 初級前期 4時間×34週	決まり文句や、丸暗記した発話ができる 物事を列挙して述べるができる 最低限のコミュニケーションができる 簡単な質問をしたり、答えたりすることができる 簡単な対面型の会話が維持できる メモ程度の短い文章や、簡単な日記を 読んだり書いたりすることができる	① 簡単な挨拶 ② 簡単な自己紹介・他人の紹介 (名前、年齢、職業、出身地について話す、質問する) ③ 物や人の存在、存在場所について質問する・答える ④ 家族について簡単に説明する・質問する(名前、年齢、職業) ⑤ 電話番号を尋ねる・答える ⑥ 簡単な買い物(物、比べる、選ぶ、数を言う、値段を聞く、払う) ⑦ 物の色や大きさを簡単に質問する・説明する ⑧ 建物の名前や場所を尋ねる・答える ⑨ イベントの場所や時間を尋ねる・答える ⑩ 週末の行動や旅行について簡単に質問する・答える ⑪ 一日の生活について簡単に質問する・説明する ⑫ 天気、季節について簡単な情報を求める・答える ⑬ 簡単な指示、依頼、その受け答えをする ⑭ 簡単な禁止表現を使う ⑮ 人、物、部屋などの様子を話す ⑯ 現在の進行状況を簡単に説明する ⑰ 話しかけ、それに応じる ⑱ 簡単なあいづちをつつ	<読解>チラシなどから最低限必要な情報を読み取る (イベント、店の広告、パンフレットなどから値段、 日にち、時間、場所、電話番号などの情報を得る) <読解>地図を見て地名(ひらがな、カタカナ)を読む <読解>簡単な日記を読む  *上記素材は、現物を若干学習者用に書き直したものを想定している  <聴解>電話番号案内を聞いて電話番号を聞き取る <書く>簡単なメモを書く(待ち合わせの時間、場所など) <書く>買い物リストを書く <書く>簡単な日記を書く  **23、24、33、34に関しては日本語能力試験4級項目であるので、 学習者のレベル、進捗状況を見て、G の段階で導入すること も可能。変更にあたっては担当講師、専任講師で協議する。
G・ 初級後期 4時間×34週	相手に若干配慮した対面型の会話が維持できる サバイバルレベルの機能が一応達成できる 短い文章を読み、重要なことを読みとることができる。 短い予定表や文章を書き、人に情報を伝えることができる。	⑲ 部屋、物の状態を描写する ⑳ 自分の意向、予定を話す ㉑ 音、匂い、味について尋ねる・説明する ㉒ 情報を伝達する ㉓ 要求、希望を述べる** ㉔ 自分の趣味や好みについて話をする** ㉕ 能力、可能性について述べる ㉖ 身体的特徴を述べる ㉗ 健康の状態を尋ねる、答える ㉘ アドバイスをする ㉙ 事物の比較をする ㉚ 経験について尋ねる・答える ㉛ 規則を尋ねる、説明する (許可、不許可、禁止、義務について尋ねる・答える) ㉜ 道順を尋ねる、答える ㉝ 原因、理由を聞く・答える・言い訳をする** ㉞ 誘う、誘いを受ける、約束する、断る** ㉟ 不確かな判断、推量を述べる ㊱ 物や行為の授受について述べる ㊲ 仮定する・仮定してもの言う ㊳ 迷惑や被害について説明する ㊴ 婉曲的に意見を述べる ㊵ 婉曲的に希望、要求する ㊶ 命令する ㊷ 同情の意を表明する ㊸ 感謝の気持ちを表明する ㊹ お祝い気持ちを表明する	<読解>簡単なメニューを読む <読解>イベント情報誌から簡単な内容を読み取る <読解>旅行パンフレットを見て、行き先、日程、値段を読み取る <読解>時刻表を見て列車の時刻を読み取る  *上記素材は、現物を学習者用に書き直したものを想定している  <聴解>電話で尋ねたことに対する応答を理解する <書く>簡単なイベント情報のチラシを書く <書く>簡単な旅行日程表を書く <書く>簡単なはがきを書く <書く>日常生活や身近な話題(家族や好み)に ついて簡単な説明文を書く

表 2-2 ケルン日本文化会館日本語講座・レベル別到達目標及びシラバス( 初級レベル・場面・話題、学習項目など)

	話題・場面全般	場面話題( 具体例 )	その他	学習項目				参考 現行教科書範囲
				文型	語彙	漢字	日本事情	
G・ 34週	日常的な場面 身近な話題、 個人的な話題	<場面> 初対面の場面(パーティ) 教室、図書館、食堂 家の中(自宅、友だちの家) 店(商店、スーパー、デパート) 郵便局、銀行 電話(番号案内・受付) 交番、道で(バス停など) <話題> 自分自身・家族・友だち (名前、年齢、職業、住み、 一日の生活、週末の行動) 自分が住んでいる街、国	単語、句のレベルから 単文のレベルへ 単文を維持することができる 何度も繰り返すことにより 理解してもらえる	初級基本文型(前半) (日本語能力試験4級レベル) 例) あいさつのごとば、 名詞文、形容詞文、動詞文 (ます形、て形、ぬい形) 助詞(は、が、の、に、を、へ、 と、や、も、か、から、まで)など  *詳細は『日本語能力試験出題基準』 参照のこと	800  (能力試験4級レベル)	100  (例) 家族名称 色 職業名 日用品 基本動詞	ひらがな、カタカナ 漢字の仕組み、偏と旁  (例) おしぎ 名刺交換 家屋 食べ物 地理 服装	『日本語初歩』 1課～17課  1学期 ひらがな・カタカナ 1課～6課  2学期 7課～12課  3学期 13課～17課
G・ 34週	日常的な場面 身近な話題、 個人的な話題	<場面> 上記場面に加えて) 病院(診察室、病室) カルチャーセンター レストラン 旅行代理店 観光地、旅館 <話題> (上記話題に加えて) 趣味(コンサート、映画、 美術)、旅行、結婚式、 お見舞い	単文を完全に維持できる 複文、重文をつくること ができる	初級基本文型(後半) (日本語能力試験3級レベル) 但し、敬語は除く  例) 可能形、命令文、条件文 受身文、使役文、使役受身文 アスベク表現、副助詞 受給表現、比較表現、 モダリティ表現、接続助詞 副詞 など  *詳細は『日本語能力試験出題基準』 参照のこと	1500  (能力試験3級レベル)	300  (例) 地名 スポーツ名 メニュー 身体名称 乗り物	(例) スポーツ メニュー 旅行 観光地 結婚式 お見舞い	『日本語初歩』 18課～32課  1学期 18課～22課  2学期 23課～27課  3学期 28課～32課

表 2-3 ケルン日本文化会館日本語講座・レベル別到達目標及びシラバス(中・上級レベル・機能項目)

	機能全般	機能(具体例)	
		話す	その他の技能
M・ 中級前期 4時間×34週	相手との関係を考えて対面型の会話ができる (特に目上や、疎遠な関係の相手に失礼なく対応できる) 段落文を読み、必要な情報を読み取り、さらに要旨を把握することができる。 詳細な描写や説明ができる。 相手との関係を考えて手紙が書ける。 簡単なスピーチを書くことができる。	①～④の機能(より詳しく、複雑なレベル) ④ 相手の都合を聞いてスケジュールを決める ④ 相手の都合を聞いてスケジュールを決める ④ 相談したりそれに答えたりする ④ 方法を尋ねたり教えたりする ④ 発言の内容を確認する ⑤ 読んだこと見たことについて説明し、感想を述べる ⑤ 伝言を頼む、受ける、伝える ⑤ 援助を申し出る ⑤ 相手を誉める ⑤ 励まし気持ちを述べる ⑤ 謝る、詫げる、言い訳をする	<読解>簡単な事実文や意見文を読んで内容を理解する <読解>簡単な物語を読んで粗筋やポイントを理解する <聴解>教材化されたニュースやインタビューを聞いて理解する <書く>はがきや手紙を書く <書く>やや詳しい日記を書く
M・ 中級中期 4時間×34週	相手との関係を考えて対面型の会話が可能である(特に目上や、疎遠な関係の相手に失礼なく対応できる) 段落文を読み、必要な情報を読み取り、さらに要旨を把握することができる。 詳細な描写や説明ができる。 相手との関係を考えて手紙が書ける。 簡単なスピーチを書くことができる。	①～⑥の機能(より確実に、詳しく、複雑なレベル) ⑤ データやグラフを見て説明する ⑤ 変化を予測して述べる ⑤ 意見を述べる・賛成する・反対する ⑤ 相手の意見や考えを評価する ⑤ 苦情を言う ⑤ 交渉する	<読解>簡単な事実文や意見文を読んで内容を理解する <聴解>教材化されたニュースやインタビューを聞いて理解する <書く>はがきや手紙を書く <書く>やや詳しい日記を書く
M・ 中級後期 4時間×34週	相手との関係を考えて対面型の会話が可能である。一人で詳しい描写や説明などをし続けることができる 即興で簡単なスピーチを行うことができる。 複段落の文章を読み、必要な情報を読みとったり、要旨を把握したりすることができる。	～⑥の機能 相手を考えてこれらの機能が達成できる(目上、同等、目下、親類など、位階を考えて表現を使い分け) ⑥ 回想する・後悔する ⑥ 謙遜する ⑥ 慰める	<読解>辞書を使いながら生の短い説明文を読むことができる。
OS1上級 (会話中心) 2時間×34週	相手との関係を考慮し、話しを切り出し、話し続け、話し終えることができる。 抽象化したり、意見の裏付けをしたり、仮説をたてたりすることができる。	～⑥の機能	<聴解>生の映画やドラマを見て、概略が理解できる。 <聴解>こども向けのニュース番組を見て内容を理解できる。 <読解>辞書を使いながら生の随筆や小説を読むことができる。
OS2上級 (読解中心) 2時間×34週	事実文や簡単な論説文を読んで、必要な情報を読み取り、内容を理解し、要約することができる。		<読解>辞書を使いながら生の新聞記事を読むことができる

表 2-4 ケルン日本文化会館日本語講座・レベル別到達目標及びシラバス(中・上級レベル・場面・話題、学習項目など)

	場面・話題全般	場面話題(具体例)	その他	学習項目				参考 現行教科書範囲
				文型	語彙	漢字	日本事情	
M・ 34週	日常的な場面 身近な話題 個人的な話題 限られたフォーマルな場面 限られたインフォーマルな場面	<場面> (上記場面に加えて) 会社、趣味のサークル <話題> (上記話題に加えて) 住宅、料理、健康 年中行事	複文、重文を安定して つくりことができる。	敬語 (能力試験3級範囲 ～2級範囲) 常体・敬体の別 である体、縮約形  文法的機能語の類(日本語能力試験2級レベル) *詳細は『日本語能力試験出題基準』参照のこと	2300	600	(例) 会社組織 住宅 料理 年中行事	『日本語初歩』 33課～34課 『日本語中級』 1課～10課
M・ 34週	フォーマルな場面 限られたインフォーマルな場面	<場面> (上記場面) <話題> (上記話題に加えて) 教育、福祉、環境	複数文からなるまとまり のある文章をつくり ことができる		2800 3500	800	(例) 教育制度 環境問題 福祉問題	『日本語中級』 11課～14課 『現代日本語コース中級』 1課～9課
M・ 34週	インフォーマルな場面 でもフォーマルな場面 でも対応できる一般 的な興味に関する具 体的で事実に基づく 話題に対応できる	<場面> (上記場面) <話題> (上記話題に加えて) 労働、経営、政治、経済	段落を維持するこ とができる		3800 4500	1000	(例) 労働問題 日本の経営 日本の政治 日本の経済	『現代日本語コース中級』 10課～18課
OS1 (会話中心) 34週	一般的な興味に関する 具体的な話題、抽象 的な話題	<場面>(上記場面) <話題> (上記話題に加えて) 価値観、宗教、自然科学	連続した談話 複段落をつくりこ とができる		4200 5500	1150	(例) 日本人の 価値観 日本人の宗教	『中・上級日本語教科書 日本への招待』
OS2 (読解中心) 34週	一般的な興味に関する 具体的な話題、抽象 的な話題	<話題> 住宅、料理、健康、年中行事 教育、福祉、環境 労働、経営、政治、経済 価値観、宗教、自然科学	複段落の理解					

表2補足

機能、場面、話題に関して:上記表中の80パーセント以上を取り上げる。取り上げ方は、同レベルを担当する講師、及び専任講師が協議の上、決定するものとする。  
学習項目の文型、語彙、漢字に関して: G、G レベル:全ての項目を取り上げる。現行教科書でこの範囲に不足するものは適宜補ふ。

また、範囲外のもの(現行教科書に含まれていない場合は、学習者のレベル、進捗状況のみ、担当講師、専任講師が協議の上、必要ならば割愛することを認める。)

中級レベル以上:現行教科書では不足する語彙が多いため、副教材を利用することによって類義語を補足導入することを推奨する。  
具体的な補足内容は、学習者のレベル、進捗状況のみ、担当講師、専任講師が協議の上、決定する。

印の数字は理解語彙も含めた目標語彙数